



カンボディア踏査6000粒

佐藤, 孝

(Citation)

カンボディア学術調査報告, 1:32-39

(Issue Date)

1958-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006891>



カンボディア踏査 6000 軒

佐藤 孝

昭和32年1月16日神戸出帆、29日バンコックに着く。公用パスポートでない上、タイの日本大使館への連絡が遅れたため、携行したオート三輪車を初め、調査に必要な器材のタイ国内持込が困難となつたが、大使館の特別の斡旋により漸く許可、更に日本の三輪車運転免許証によりタイ国の免許証を取得、仮自動車番号等の交付を受けた。勿論全て何がしかの現金を握らせないとスムーズに運ばない。実に不愉快であり、又この国の政情の不安定さを思わしめた。この時から半年の後にクーデターの起つたことは当然のことに思われる。2月6日バンコックをあとにカンボディアに向う。広漠とした水田地帯は刈取がすみ、高刈された水田跡には、水牛や黄牛が放牧されている。プラチンに1泊、国境の町アランヤプラテトに向う。丈の低い疎林や竹林で殆んど耕地も人家もないところが百数十軒も続く。2月8日アランヤプラテトからカンボディアに入る。何の天然の境もない国境の遮断機の下を越えると、不思議と顔立も言葉も違うカンボディア人、そでの下が公然と行われたタイに比べ純朴な感じのカンボディア官吏、赤と青の中央にアンコールワットを配した国旗が沢山ひるがえる新しい独立国に入つた印象はまことにすがすがしい。海港を持たないカンボディアに入るには、タイか南ヴェトナムを通過しなければならない。南ヴェトナムの税関は更に悪名高い。目下フランスの手で建設中のカンボディアのコンボンソム海港が完成すればもつと気持よく容易にカンボディアに入ることが出来るだろう。

シソホンの町に向う道の両側は焼けつくように暑い疎林地帯で、チークの若木等が乾燥期に入つたためすっかり落葉している。道路は急に悪くなり、大きな碎石が敷かれている。ここを過ぎると禾本科の草原がつづき、墓石の様な白蟻の塔が沢山立っている。遠く黒煙が上つているところをみると村があるようだ。殆んど人影を見ない。ここから奥へ反政府の自由カンボディア軍が逃げこんでいるということだつた。シソホンを過ぎると一面の水田地帯で、ここはバタンバンを中心とするカンボディアの穀倉である。タイと同様高刈されたあとに水牛、黄牛が放牧されている。

水田跡の水溜りに白いツル(?)が下り立っている。稲の苗を喰害するカニの一種を食べてくれる益鳥らしい。乾田のいたるところに穴があいていて、このカニが隠れている。大きな角を水平にしてユウユウと水の上に体を露している水牛の背中に白サギの様な鳥がとまり、背中にのつた泥の虫をとつて食べている。漫画的な風景である。水田には到るところに大木が立っている。人や牛の憩いの場所になるのか、境界か何かの目印になるのか。しようしやな道標が1軒おきに立ち、正しい距離を示してくれる。ところどころにある銃眼のついた監視哨も今は朽ち、独立への戦いの想い出を残している。バタンバンに1泊。ここにはカンボディアに3つしかない高等学校の1つがあり、そこの学生がいろいろ世話してくれた。友人が目下日本に留学中で、自分も来年は留学したいので日本語を勉強しているとのことで、日本語のいい入門書を慾しがっていた。高等学校では全てフランス語で教育されていたのだが、最近急速に英語教育が盛んになり、この青年も習い始めてから2年足らずというのに上手に話した。日本ではエンジニアの勉強をしたいとのことだつた。その後、日本留学を望むカンボディアの青年数人にあつたが、皆エンジニアになりたいと云い、農業を勉強したいと云う者がいなかつたことは、農業国カンボディアにとつて大いに考えさせられることである。日本で産婆の勉強をしたいというヴェトナムの娘や、皮革製造の技術を習いたいという華僑青年等の現実的な希望と、カンボディ

アの現状でエンジニアになりたいというカンボディア青年の夢を思い合せると興味がある。

バタンバンを発ちプルサットに一泊、ここで全く意外な人物が訪ねて来た。もと日本軍で働いていた日本名トラゾウというカンボディアの下士官で、子供の名前もミカドと日本名をつけているとか。なかなか分りにくいが、とにかく日本語で話す。また日本人のところで働きたいと云っていた。翌日この父母妻子に会った。父は小学校の先生で、月給7,000リエール（7万円）とついているとのことである。どうもこの国の人は、人物を判断するのに、サラリーの多少を目度とするように思えた。地位が高く月給が多い人は偉い人、すなわち尊敬すべき人となる。「あなたの月給はいくらか」と聞かれたので、一寸考え、14,000リエールと答えた。大学だから小学校の先生の2倍にしておいた。3,000リエールなんて本当のことを答えたら、この兵隊の給料より低いことになり、とたんに軽蔑されそうだったので。

プノンベンに近づくにつれ交通量も多く、バスの屋根に荷物や、時には人までも満載し、100%利用しているのは面白い。それでいて70~80km/hのスピードで走る。2月10日、首府プノンベンに着く。プノンベンは人口20万とも、40万とも、又60万とも云われる近代的都市で、美しいマホガニーやタマリンド、マンゴーの並木が日蔭をなし、火焰木やブーゲンベリヤの美しい花咲く街である。メーコン河の畔にある白堊の王宮はもやが立ちこめたように美しい。どの家にも国王の御真影と王子シャヌーク殿下の写真が飾られている。シャヌーク殿下は国民の信頼を双肩に担って立つ稀代の英傑といわれている。街の大半は華僑が占め、その他ヴィエトナム人、フランス人、インド人等が住み、カンボディア人は粗末な家や軒下に住んでいる。どれが純粋のカンボディア人か最初は一寸見わけがつかなくつた。街角に屯して客を待っている沢山のシクロ（リンクク）の運転手、赤や青、黒のベレー帽を被った兵隊や巡査が目につく。これは間違いなくカンボディア人である。東南アジアの他の国と同様、カンボディアも経済は完全に華僑に握られている。立派な病院があるかと思うと街頭の歯医者や金銀や赤、緑色の義歯を入れたり、抜歯をしている。街の中心に大きな市場があり、その付近は夜中も殆んど休むことなく田舎から車がいろいろの物質を運んで来る。丁度果実の多い時期で、バナナ、パパヤを初め、マンゴー、マンゴスチン、ドリアン、竜眼、パラミツ、サワサップ、パインアップル、サボジラ、みかん類が氾濫していたが、嘗つてジャバやシンガポールで味つたものに比べると味も外観も劣るようだった。西瓜も沢山あつたが糖度6~8度で水つぽいものばかりであつた。馬鈴薯や玉ネギは輸入されるが、日本でみる野菜はソラマメ、ゴボウを除き大抵のものがあつた。特にレイシ、トウガンの立派なのに驚いた。プノンベンを起点としてカンボディアの全州（14州）をオート三輪車を運転して調査した。

農業関係の試験機関には、プノンベン周辺に農林省の研究所、果樹の試験場、胡椒の試験場、獣医関係の研究所、農学校（2年制）がある。地方にはコンボンチャムの試験場、シエムレアップの灌漑試験地、バタンバンの稲作指導農場、稲の品種改良所、プルサットの試験地、ボコールにはシャヌーク殿下がひらいている高冷地（約1000米）蔬菜園芸学校がある。

これらがどのような仕事をしているか詳しくは述べないが、バタンバンの稲品種改良所以外は何の仕事もしていないし、たとえしていても何かビントの外れたことだつた。農民の技術の向上とか、増産に対する働きかけは何も見られない。140点ばかり集めた米も品種改良所からもらったもの以外には、1つも品種名のあるものがなかつた。農民も亦農民で増産意欲がない。雨量の多い南部のタケオ州には2毛作が行われていると聞いたが、実際みたところでは、湛水されてはいたが2毛作をしている様子はなかつた。他の地方は乾燥期で乾ききり、瘠せきつた土地が多く、反収僅か5~6斗の低い収量に甘んじている。粳は全部といつていい位華僑が買上げる。而も青田売或はまだ作る前からカンボディアの農民は借金する。米の買上価格は華僑の

思うままになる。増産すればそれだけ安く買上げられるだろう。この組織では増産意慾も起らない。農民が技術指導に欠けていることは、稲以外の作物の栽培で一層痛感する。同じ畑に西瓜、南瓜、キウリ、トマト等を混ぜて、雑然と栽培していたり、とにかく技術以前の状態である。

もともと農業関係ばかりでなく、カンボディアの高い地位にある官吏はフランスの大学等に学んだ人が多い。優秀というより名門や金持のゆえに留学できた人であるため、どうも国民のためとか、国の将来といったことを考えず、自分の地位なり財産を守ることにのみ関心のある人が多いのではないかと感じられた。

これに引きかえ、華僑(潮州系)は都市近郊に蔬菜園、果樹園をもち整然と栽培している。乾燥期には灌水がなかなか苦勞で、華僑は如露になつた重い水桶を担ぎ畦間を歩き乍ら朝夕2回の灌水をする。又川から水車で水を引いて来て灌水しているところもある。カンボディアで2〜3回見受けた化学肥料(硫酸)もこれら華僑が使つているものだつた。南部海岸近くの胡椒畑も殆んど華僑の手になるもので、誘引と収穫に勞力を惜まず励んでいる。

この様にカンボディア人は全く怠け者で、察しが悪く、無能のようであるが、決して輕蔑出来ない国民である。実に好人物で表裏のない、自分の欠点をよく辨え、善惡の解る純真な民族である。これには仏教の教化が大きいと思う。ボロの着物を着、あばら屋に住み、まずい物を食べていても、寺にだけは充分献金する。一寸した町にも立派な寺がある。寺には寺小屋があつて子供を教育している。田舎に行つても文盲の少いのは僧のおかげであろう。しかし勿論自然科学的な教育ではない。地球が円いことを知らずに上の学校に進む者があるときく。頭のよい者は多く僧になる。小乗教は戒律厳しく独身で子孫を残さない。遺伝的にいつてもカンボディア人は益々頭脳が低下して行くことになる。仏教は国民に大きな教化を与える半面、カンボディアの産業にはブレーキをかけている。然し僧が全部産業に無関心なわけではない。カンボディア独立の志士、ダルマワラ ベロン大僧正はカンボディア第一の高僧であり、2回日本を訪ねた親日家であるが、カンボディアの産業発展や社会問題の改善に大きな情熱をもつていられる。民主教育協会の宮崎氏から予め紹介されていたので、6回程訪ねる機会があつた。私がカンボディアを廻つて感じたことをいろいろ卒直に述べた。換金作物(經濟作物)の非常に少いこと、1本の油ヤシも、カカオも、コーヒー——僅かはあつたが——もなく、僅かの甘蔗も子供がしがむ程度で、ココヤシも熱帯の景觀を引き立たせているにすぎない。もしこれらの作物の栽培が試みられ、環境の不適その他で失敗したのなら、1本位はエスケープして見られるもののだが、1本もないことは未だ嘗てこれらが試みられなかつた証拠である。南部カンボット以西の南斜面は雨量多く大森林が覆つている。又コンボンスブウ西方の大森林は、コンボンスムの海港開設に伴い、經濟価値の高まること必至で、キリロムの水源を利用すれば一大農地となるだろう。又ストントレン以東の大原始林はメーコン河及びその支流を利用すれば、各種作物の大規模なプランテーション適地となるだろう、と云つた様な意味のことを話して大いに共感を得た。

カンボディアには全く經濟作物がないわけではない。コンボンチャムを中心とするゴムのプランテーションは世界一の優秀なものである。これは、この附近に点在する赤土地帯の土壤の肥沃さによるといわれている。現在赤土地帯はどんどん開墾され、芽接ぎされたゴムの苗が植えられつつある。ここの労働者は主にヴィエトナム人ということである。

カンボディアの開発が遅れていた理由は、フランスの植民地政策にもよるが、ハノイやサイゴンを中心とする北、南ヴィエトナム、交趾支那が地理的にも、又安価にして勤勉な労働力を得る上にも、先ず開発し易かつたため、カンボディアまで手が伸びなかつたものと思われ

る。カンボディアの自然環境が開発、特に農業開発に不適だつたとは思われない。

カンボディアを廻つて意外に感じたことは密林の少いことである。ニューギニアやボルネオの様に密林に覆われているところは少い。チークその他の落葉疎林で、道路から見渡せる範囲には余り大木もない。表土は雨で流され、農業上全く価値のない土地が多い。この疎林が突然線を引いた様に密林に変るところがある。これは土質や水質の関係ではなく、山地蛮（モイ族—カンボディアでは全て山地蛮をブノン族という）が焼畑をして放棄したための人為的な原因によるものようだ。ブノン族は今なお東部の山地帯に住み、山林を焼き払つて陸稲を栽培し、毒矢で野牛や鹿を射殺して乾燥肉を作り、原始的な生活をしている。私が悪路をつき困難して訪ねたブノン族の部落は何れも20数軒から成り、牛、豚、ニワトリ等を飼い、米で造つた酒の入つている大きな壺に、細竹を入れて酒をのみ、数個のドラを調子よく鳴らして楽しんでいる。家も人も割合清潔な感じがする。顔立ちや肌の色も全く日本人に似ている。鉢巻をし褌をしめているのも我々に一層親近感を与える。彼等の唾のついた細竹に口をあてて一口吸つた酒の味はやや辛く、アルコール分は相当強いようだつた。カンボディア政府は彼等に正しい農法を説き、焼畑農法を止めさせようと努力はしているようであるが、成果は疑わしい。カンボディアの大きな潜在地力はどんどん彼等によつて失われて行く。

密林疎林の林産資源も、現在僅かの木材とカンボディア漆、樹脂等樹脂が採取されているにすぎない。有用材は少いようであり、又、運搬が困難である。ブノンベンのメーコン河に面するところには華僑の製材所が沢山あり、上流から筏で流されてきた材を製材している。スノウルの近くではフランスとドイツ製の製材機を備えたカンボディア人経営の製材所が珍しくも見られたが、立派な機械の割合にはカンボディア人労働者の能率は悪く、華僑製材所にみられたような活気がなかつた。キリロム高原（約700米）の松、コンボントム東北方の平地で強い酸性土壌（pH約4.0）の雑木林の中に見出された沢山の松の木は、パルプ資源に役立つかも知れないが何れも運搬が困難である。天然のカンボディア漆の採取もきわめて非能率的である。

黄牛100万頭、水牛40万頭といわれるが、この数字は余り当にはならない。沢山いることは事実で、乾燥期に水田跡地の稲藁を食つている黄牛、疎林の僅かに芽生えて来た禾本科の野草を食つている黄牛、何れも瘠せて骨ばつている。雨期には水田地帯の黄牛は恐らく疎林地帯に放牧されるのだろう。黄牛に比べ水牛は皆丸々と肥つているのは一寸不思議なようである。真黒い汚い体に唯1ヵ所美しい部分がある。尻尾の下から下腹部にかけて水々しい桃色をしている（褌でも締めて隠してやりたいような気がする）。白い水牛もよく見かける。野牛もおり、2種類の角を持ち帰つた。これは家畜の牛とは自然交配しないようである。豚は華僑やカンボディア人、ブノン族に飼われている。農家では飼料にバナナの茎——葉鞘——を小さく刻み、これと小米や糠をまぜているのを見受けた。鼻の長い、腹部を地にするようにしている原種的なものから、パークシャー系のものまで種々雑多である。南方に多い野猪がいないようなのは一寸意外であつた。山羊と、この暑さにも拘らず深く毛におおわれた緬羊とは各地で見受けられる。数10頭群をなしていることが多い。馬は体軀は小型であるが暑さに強く、馬車を引き炎天下を走つている。ニワトリ、アヒルも多く、特にアヒルは集団をなして水溜から水溜へと飼われているのを見受けた。密林地帯ではよく野雞に出会う。真赤なトサカ、黒地に金色がかつた羽をつけ、近よると高く舞上つて森林の中へ逃げ去る。森の中からトキをつける声を聞いた時は何とも云えぬ変な気持になつた。犬の多いのにも驚く。

これら多くの家畜も、豚、ニワトリ、アヒルの他は殆んど肉は利用されず、皮工場もブノンベ近郊に華僑の経営するヤシの葉葺きの貧弱なものが9軒あるだけで、その1軒は機械化しているというが、大きな機械には埃がたまり、充分使いこなしていないようであつた。この9工

場で処理される皮の数も僅かであり、乾皮としても輸出されるだろうが、まだまだ利用はほんの一部ではないだろうか。勿論、これらの工場産の皮製品は、タンニン鞣のものもクローム鞣のものも質が甚だ悪い。なおこれらの工場で使うタンニンの原料は、カンボット州の海岸地帯に自生するマングローブの樹皮である。

カンボディアには工業らしいものは極く僅かで、紡績工場が一つ、これも原料の綿は輸入によつており、各地でみるカラボニウム棉は生垣用にすぎない。なおカンボディア人は家内工業的にハタオリをする。カンボディア産のタバコを使つたタバコ工場が一つ。勿論、これだけではとてもカンボディアの全タバコ需要量をまかなえず大半は輸入による。貧しい者はカンボディア産の刻みタバコを紙に巻いて喫う。マッチ工場が一つ、ヤシ砂糖の精製工場が一つ——と云つてもカンボディア人が屬ヤシからとつた砂糖を丸い形に作る程度——ある。これらは勿論華僑の経営になるものである。木炭焼、煉瓦作りも各地で行われている。これも華僑やヴィエトナム人のものが多いようであつた。

最近メーコン河開発計画という問題をきく。メーコン河は印度支那3国（ラオス、カンボディア、南ヴィエトナム）にとつては非常に重要な意義をもつ。海港をもたないカンボディアにとつて、メーコンは唯一の海に出る水路である。海からの物資、奥地からの物資の輸送路となる。ただクラチエ北方の浅瀬が、乾燥期に於て上流との交通を遮断する。国境近くのラオス領のコンの滝は何百万キロワットかの水力発電が出来るといわれているが、カンボディアの中心地帯から遠ざかっている為実現されない。雨期には、かさの増した水はトンレサップに逆流し、メーコンのデルタ地帯を洪水から防ぐので、天然のダムといわれる。広さ、びわ湖の4倍といわれるトンレサップはこの為、更に4倍に膨れ上るといふ。淡水魚、年10万トンの水場があるトンレサップは、カンボディアのもつ宝庫である。洋々たる眺めは湖よりもむしろ大海である。しかし水は赤く濁り、浅く、湖岸から3~4軒離れたところにも水上部落が立つている。この部落にはヴィエトナム人や華僑が住み、漁業に従事している。ここでもカンボディア人は、この利益の多い仕事に貢献していない。獲れた魚は塩干魚にして国内消費の他、シンガポール、香港方面へ輸出されるという。又、ニョクマム（魚醬）や魚のペーストに加工され、強い異臭にも拘らず美味の故に印度支那では重要な調味料となる。初めて食卓に出されたとき、かねて聞いていたその臭気を嗅ごうとして鼻を近づけたら、カンボディア人に、においは悪いが味が良いから、味だけ味わえといわれた。アミノ酸醱酵をしたこの味になれると、なかなか美味であり、滋養にもなる。原料の塩はカンボット東部の塩田で華僑の手によつて作られる。

今なお辺境の地には反政府の自由カンボディア軍がおり、又稍々大がかりの盗賊的な徒輩もいるときく。自由カンボディア軍について詳しいことは知らないが、今の政府が多分に貴族政治的であり、大多数の国民の幸福を計つていないという点に不満をもち、民衆を救うことを標ぼうしているとのことで、今のところ、共産国との関係はないようであるが、将来これとのつながりが出来る可能性は多分にあるのではないだろうか。各都市に軍隊が駐屯し、更に僻地には小部隊が分遣されている。特に橋や、渡しのような要所には監視哨を設け、銃剣をつけた兵が立つているが、家族も一緒に住み、軍隊というより、小さい村があるようだ。然し屯田兵のように農耕もせず、全く消費一方の今の制度は一考を要する。自由カンボディア軍は北西のタイ国境に近く、又、ボコール北方の山中に逃げこんでいるというが、今のところ大きな動きはなさそうである。私が三輪車を乗り入れ、身の危険を感じたことは一度もない。勿論一旦危険に遭遇するまでは、そういつたものなのかも知れないが、貴重な物や銃等を持たないことも反つて心安かつた。内地で恐しいと聞いていたブノン族は、実に愛すべき蛮人であつた。

この中立を宣言している新独立国に、米国をはじめ、フランス、ソ連、中共等が多額の経済援

助、技術援助を行つている。殊に米国の援助は多く、橋梁、道路建設等に大活躍をしている。米国の援助物資には必ず、模様化した星条旗のマークが入っている。農業部面にも多くの援助がみられるが、理解し難い援助の仕方が多いようだ。例えば、非常に瘠地の水田地帯を水田2毛作にするため、乾燥期に大きな沼の水を灌漑する一大工事を起している。ブルトーザ群は米国の機械力を誇示しているに過ぎない。又海岸近くのスロープにココヤシを栽えるために林を伐り開き、ブルトーザで清掃し、トラクターで全面耕起をしている。一雨降れば表土が流れ、ヤシ園にも殆んど間作しないカンボディア人のことであるから、やがて雑草に覆われてしまうだろう。

色々の本によるとカンボディアは悪疫瘴癘の地と云われている。ドラポルトの「カンボディア紀行」を読んでも、探検隊員が悪疫に倒れる苦しみが書かれている。しかし今のカンボディアは必ずしも悪疫瘴癘の地とは思わない。かつて暮したニューギニア地方に比べれば遙かに健康地といえる。マラリアも永い乾燥期で、蚊の生育に適しないためか、平地帯にはないようだ。畑作地帯に行くと、よく腹の大きい子供に出会う。指で押してみると、皆やわらかい。これが固いとマラリアのしようけつ地帯で、脾臓肥大を起している。柔いのはイモ類等澱粉の過剰摂取によるらしい。暑い炎天下で、乾燥した水田跡の白く濁つたたまり水や池の水を農民は手ですくつて顔や頭の汗を洗い、ついでに飲んでいる。アメーバ赤痢等消化器の伝染病も少いようである。然し一旦雨期にでも発生すれば衛生思想の低い国であり、蔓延するであろう。農村には切傷の化膿している者が多い。ペニシリン軟こうを塗つておくと、次に来た時は治つて喜んでゐる。効き目が実に鮮か。10才位の子供が全身ひどいカユミを催す皮膚病に冒されていた。手の皮は硬化している。然し伝染力は弱いらしい。只その子1人だけであつた。ライ病のように全身白くふくれ上つた子供？ が家の中で寝かされているのを見た。或村では子供の眼病がひどかつた。恐らくトラコーマだろう。目薬をつけてやると、次から次と集つて来た。親が汚い指で兄の眼を押し開き、同じ指で妹の眼を押し開く。眼瞼の裏側は紫色になつている。大人にも悪い者がいた。僅かの目薬はすぐつきてしまつた。どのふくれ上つた男をよく見かけた。何か風土病であろうか、ヨード不足にもとづく生理病であろうか。奇型の人が多い、と云うよりはカンボディア人は奇型の人自身も別に恥かしがる様子もなく外を出歩くのでよく目に付くのだろう。衛生施設、病院といったものは誠に不完全のようである。一寸した町には赤十字のマークの入つた診療所があり、医者（正しくは看護士とでも云うのか）がおり、薬品を置いている。注射薬なんかもあるが、どの程度の活動をしているのか甚だ心許ない。プノンベンには大きな公立病院が2,3ある。華僑、仏人、ヴィエトナム人、カンボディア人等の個人病院、医院がある。パリ医学博士等の看板がかかげてあつたりするが、どうも余り親切ではない。急病で夜往診を頼んでも、「何故昼の間に来なかつた」と断られてしまう。土曜午後から日曜にかけ、プノンベンの医者のお大半はドライブでリクリエーションに行つてしまい、町の医者は殆ど留守になる。1回の往診料4000~5000円、盲腸手術で1週間も入院すれば15万~20万円位取られる。医薬分業で、一寸睡眠剤や風邪薬を買うにも1500円位の診断料を払つて処方せんを書いてもらう。薬が又高く、薬局も日曜は殆ど休みで、急病には間に合わない。薬はフランス製が多く、武田の薬も多少入つているようだつた。個人医院は設備が不完全のようである。或る華僑の医者は中国語の他、フランス語、ヴィエトナム語、英語をよく話していた。幾ら腕があつても先ず語学が堪能でなければならぬようだ。農民は色々の草を薬用にするが、カンボディア語の知識が不十分のため詳しくは聞けなかつた。クラチエ東方の農村で、移動映画班が衛生思想普及映画をやつているのには驚いた。美しい天然色のマンガで、恐らく米国で作つたのではないんかと思う、カンボディア語のトーキーで寄生虫に関するものだつた。画面にでてくる顕微鏡なん

か恐らく、農村の人に理解できないシーンが多いのではないか。映画は映画、現実の生活は生活、全く切りはなれたものではないだろうか。私達が月世界の物語をトリック映画で見るように。

カンボディアには井戸が無いと聞いていた。農家には大きなカメがあり、この水を使っている。しかし村に入ると必ず井戸か池があり、この水をカメに運んで溜めておく。セメントの円い框のある井戸もあり、木を組んだ四角い框もあり、ただ土を掘っただけの井戸もある。地下水位もまちまちで、地表から僅か2~3米のところには水面のあることもあり、10数米の深い場合もある。勿論雨期には、ぐつと地下水は高くなる。どの井戸水も程度の差こそあれ、白く濁り、なま温い。四季の気温変化の少ないため水温も変らない訳である。カンボディア人は工夫や生活の改善を計ろうとしない。毎日数十回、数百回となく汲み上げる井戸に、ハネツルベのあるところは少い。竹や縄の先に桶をつけ、汗水流してたぐり上げている。水を汲み上げる池ではカンボディア人の女が、踏み外せば転落しそうな足場を、腰で調子をとりながら水桶やカメを頭に載せて上つてゆく。華僑の井戸はハネツルベで、中々合理的な生活をしている者が多い。コンポンチャムの農林試験場では赤土に掘った井戸で、丸い木に縄をまき、手回しハンドルで10米の深さから水を汲み上げていた。赤土でも水の色は殆んど澄みきっていた。井戸水のpHはまちまちで5.6~7.0の範囲であつた。乾燥期でも、掘ればいくらでも水があるという印象を受けた。

カンボディア人は余りスポーツをしない。するだけの気分的な余裕もなし、適当な指導者もいないようである。しかし華僑は盛んにスポーツを楽しむ。蹴球、バスケットボール、バレー等球技が得意のようで、蹴球の遠征軍を香港や中共に送っている。「高棉（カンボディアのこと）足球队訪華第貳仗再敗」などの新聞記事も見られる。カンボディア政府に招聘された講道館の森岡五段は柔道連盟の師範として、フランス人、華僑、カンボディア人、ヴィエトナム人等の柔道愛好家を指導している。技のみならず柔道精神の鼓吹練成に努めていられる。スポーツクラブの会員のみが、プールやテニスコートの使用を許される。縄飛びやハネツキ、タコ上げといった日本の子供の遊びに類するものを楽しんでいるカンボディア人の子供はみかけなかつた。汚いドロ沼で水浴びしている農村の子供は多い。

カンボディアは周年暑い。一番涼しい11~12月でさえ26°C位を示している。2, 3, 4, 5月是最も暑く、しかも1957年は16年振りの暑さと言うことであつた。室内の気温は大体31°C位で、日本の盛夏より、かえつて低い位であるが、暑さは実に耐えられない程である。これでも乾燥期で、湿度70%位であるので蒸し暑さがないだけ楽である。海から200軒離れたプノンペンでも、1日の気温の変化が少い。午後4時~6時が最高で、31°Cあると、夜中の12時でも30.5°C位あり、一番涼しい早朝は30°C位で、1日の較差は僅かに1°C位であり、これが一層暑さを感じさせる。夜の安眠がとれないことが体力の消耗を大きくする。水道の施設が貧弱なため暑い盛りに断水が起ることが多い。カンボディア政府がキリロムの高原都市建設を日本に依頼して来た気持が分る。南方の国々には植民地時代から避暑地があつた。フィリッピンのパギオ、南ヴィエトナムのグラット、ジャバのバンドン等は何れもよく耳にする有名な高原都市である。疲れた体力を癒し、鈍くなつた頭の働きを恢復するのに、この涼しさが必要で、これは白人ばかりではない。首府プノンペンから120軒はなれたキリロム（歓喜の丘の意）は700~800米あり、高原都市建設には格好の高地である。焼けつくような暑い水田や疎林地帯を通りすぎると大原始林が展開する。道路の土は急に赤くなり丁度赤土地帯のようであるが、周囲の森の土は灰色をしており、礫少く土層が深い。この灰色の土を道路に敷くと風化して赤褐に変るのではないかと思う。この密林は相当の中と長さともつものようで、虎、野象等が棲息しているという。不幸にして野象と虎の糞、野兎、野鶏、猿、美しい蝶々の群を見たにすぎない。この密林を過ぎると相

当急な上り坂となり、林相は一変して疎林となる。赤褐色の枯葉と紺碧の空は秋を思わすが、実に暑い。オート三輪のエンジンをまたいだ足には45°C位の熱風が吹きつける。この急坂と子供の頭大の碎石の敷かれた道はジープの通行を許すだけであり、勿論、三輪車の登行は初めてである。ジープにも負けないダイハツ三輪車の力に、同乗のフランス将校も驚く。然し2本橋には困る。1枚の板を真中に渡し、危険を冒して通過すること数度。カンボディアの奥地に行くと度々この2本橋に遭う。川中の狭い場合は三輪車の横に結び付けて携行している板を外して之を渡して通過するが、広い場合は涙を呑んで引き返さねばならなかつた。スレポック、コンポントムの東北方、カンボットの西等全てこう云つた所であつた。林相が一変して松林になる。道のなだらかな起伏を通り、車外に出ると冷気を感じる。これが北緯10°の熱帯地とは思われない。水のごんごんと湧き出る清流の近くにテントを張り二夜を過す。この川は大きな岩石が堆積し、岩の間から水がほとぼしり出、間もなく岩石の下に再び消えてしまい、又數十～数百米下流で流れ出ている。この水はカンボディアで一番冷い水で、22°Cであつた。夜は猛獣にそなえて火をたいたが、その火も消え、夜中目をさますと野獣のホーコーが聞える。鹿らしい。朝は霧が立ちこめ、太陽が白く松の間に見えかくれし、冷気が身に沁みる(20°C)。太陽が高くなるにつれ澄み切つた青空があらわれ、鳥のさえずり、美しい蝶々の輪舞、苦しかつた昨日までの暑さを忘れさせる。道路を改修し、家を建てれば、仕事に疲れたカンボディアの人々の憩いの場所となり、更に病院を建てれば、むしばまれた身体の恢復には誠によい保養地となるだろう。しかし現政府はキリロムの都市建設は有産階級の利用のみで、カンボディア大衆の手には届かないものであるとの理由で反対している。日本の援助はもつと有意義に、カンボディア人の広く利益となるもの、例えば農事試験場とか道路、浄水場の建設に当てるべきだと主張しておりキリロムの計画も流れてしまつた。

岸首相が東南アジア諸国を訪ね、技術援助を約束して帰られた。カンボディアだけを考えても、これをどんな形でもつてゆくか難しいことであり、更に成果を上げようとするのには更に更に難しい。金と力を無駄に使わず、有効な技術援助が出来るためには先ずカンボディア人そのものもつと勤勉に努力するようにならなければならない。常夏の気候が人間をナマケ者にするためという同情は、同じところで勤勉に働く華僑をみれば意味のないことが解る。9世紀から11世紀にわたり偉大なアンコールワットやアンコールトムを築いたクメールの血が一滴でも今のカンボディア人に流れているならば、長い植民地時代の無気力から目覚めてくれるのではないかと思ひ、又その日の1日も早いことを希う。滞在中示されたカンボディア人、華僑、ヴェトナム人等の大変な親日感情は忘れられない。

5月9日船長の厚意で浅野海運辰久丸に乗りブノンベン出帆、香港に到る。香港にて外国船に乗りかえ、5月31日、140日振りに神戸港に着く。集めた資料については専門別に目下整理中である。

終りに本調査に多大の援助をいただいたダルマワラ ベロン大僧正はじめ、ホートンリブ氏(農林省)、ジュンパン氏(巡查)、オーコンホン氏(クラチエ華僑理事長)その他カンボディア官民の方々、吉岡大使はじめ大使館の方々、鈴木御夫妻(ブノンベン美術学校教授)、青木、馬奈木(日南開発)、井上(東銀)、久沢(大南)、駒井(鹿島)、天野(江商)、森岡(柔道師範)、天弘(浅野)、神原(長谷川)、西村(丸紅飯田)、鎌谷(住友)、その他日本商社ブノンベン駐在の方々、揚金清(朱潮豊)、コラン(仏軍将校)の諸氏に深謝します。又協力していただいた故鈴木重通氏(大使館)の冥福を祈ります。

学会誌「熱帯農業」第1巻第3号及び雑誌「農業技術」第13巻第1,2号に掲載したものに若干加筆又は削除した。